

1987年にノーベル賞を受けられた利根川進博士が、受賞時になされた談話は極めて印象的であった。『僕はあまり頭が良くない。それなりに勉強したが、成績は上がらなかった。もの覚えが良くないのか、暗記ものは特にアカンな。頭のいい人間は質問されると、パッと答えを出す。ところが僕はあまり早くない。しかし、頭がよすぎると、大きな発見はできない。頭が良すぎるとスマートに仕事をしようとする。だが、新しい発見をしようすると、時には常識から外れたこともしなければならぬ。成功すれば英雄、失敗したら素人扱い。頭の良すぎる人間はそんな冒険ができない。重要なのは頭より心だ。あることを知りたいと思ったら、いてもたってもいられなくなり、手段を選ばず疑問を解こうと努力する。そのことを考えると飯もノドを通らなくなる。そのくらい取りつかれないと科学はできないと思う。芸術家もたぶん、そうじゃないだろうか。科学で成功するには、好きになること以外にない。なにが正しいのか、前もって分からないのだから、好きか好きでないか、打ち込めるかどうかにかかっている。好きなことに打ち込むより、待遇や組織あるいは給料ばかり気にしている日本の若い研究者は、人生設計が細かすぎるのではないのでしょうか』。知識を知るだけの学問でなく、好きになることの大切さを教えられる。